

創世記4－5章「暴虐の種と平和の種」

1A カインの道 4

1B 信仰者の殺害 1－7

2B 大地からの呪い 8－16

3B 文明の中の暴力 17－24

4B 主の名を呼ぶ子孫 25－26

2A セツの子孫 5

1B 死の支配 1－5

2B 短くなる寿命 6－17

3B 死を見ない者 18－24

4B 呪いの大地の慰め 25－32

本文

創世記4章を開いてください。私たちは、前回、アダムが罪を犯して、彼とエバがエデンの園から追放されたことを読みました。その後、彼らが男の子を生みます。その後の息子たちと娘たちが、どのようになっていくのか？それが4章と5章の話です。

これから読んでいくにあたって、主が蛇に対して語られた言葉を念頭に入れておくといいです。「3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間に、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」女の子孫によって、蛇の子孫の頭を打ちます。女と、蛇との間には、絶え間ない敵意、あるいは葛藤があります。この確執が、アダムとエバから生まれた子たちに、早速出てくるのです。

1A カインの道 4

1B 信仰者の殺害 1－7

¹ 人は、その妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「私は、主によって一人の男子を得た」と言った。

アダムとエバの間から生まれたのが、カインです。カインの名前の意味は「得る」ということで、まさにエバが、男子を得たと言っているところから来ています。この「主によって一人の男子を得た」には、今、読んだ、蛇に対する主のことば、女の子孫が、蛇の子孫の頭を打つという約束への期待が込められています。自分の男の子によって、ついに蛇の仕業を打ち破るのだという期待です。

ここのヘブル語は、もっと正確に訳すと、「ひとりの男子、主を得た」となっているそうです。つまり、

女の子孫が、そのまま主ご自身であるという信仰の表れです。イザヤが預言したとおりですね、「イザ 9:6 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」この男の子が、神ご自身であるということ。神が人となって来るということです。

² 彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは大地を耕す者となった。

「アベル」とは、「息をしている」とか、「何でもない」というような意味です。人の命は息のようだ、という言葉が、聖書にもありますが(詩篇 144:4)、はかなさが込められています。カインに対しては、エバは強い期待をしていましたが、弟息子アベルについては、人の生きていることをはかなさ、虚しさを抱いていたのでしょう。けれども、結果は正反対でした。アベルこそが、信仰によって、義人の証しを残しました。そしてカインが、後に「カインの道」と呼ばれる、主への反抗と暴虐の道と呼ばれるようになります。

そして、アベルは羊を飼う者、カインが大地を耕す者です。カインは、父アダムの仕事を受け継いでいます。エデンの園を追放されてから、「**人が自分が取り出された大地を耕すようにされた**」とあります(3:23)。いわゆる兄息子が、父の仕事を受け継いでいるのです。

神が、人の思いと異なり、ご自分の恵みによる選びによって、事を運ばれることを思います。創世記には、弟が神の約束を受け継ぎ、兄が退けられる証しがさらにあります。イシュマエルではなくイサク、そしてエサウではなくヤコブです。そして、後から来るものとして、外見が良いサウルではなく、ダビデが選ばれました。しかもダビデは末の子です。人間の視点からの思いと、神の視点からの逆説的な、恵みの選びの確執と言ってよいでしょう。

³ しばらく時が過ぎて、カインは大地の実りを主へのささげ物として持って来た。⁴ アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。主はアベルとそのささげ物に目を留められた。

⁵ しかし、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それでカインは激しく怒り、顔を伏せた。

この箇所は、午前礼拝でお話したように、聖書の大きな流れで読んでいかなければなりません。今、じっくりと一節見て言っているのが、逆に見逃してしまっていますが、あくまでも3章からの流れで、この話があります。そうすると見えてくるのが、「カインが、大地の実りを主に献げるのは、自分の仕事でもあるし、ごく自然に見えるが、そんなものを主に献げてはいけない」ということが分かります。なぜなら、大地は呪われたものとなったと、主が宣言しておられるからです。

しかし、アベルのしたことは、アダムとエバが主によって皮の衣が与えられたところに沿った行動です。羊や山羊など、それを犠牲として屠り、血を流したことによって主は彼らの罪を覆ってくだ

さいました。それと同じ流れにアベルはいます。それをヘブル人への手紙では、こう評しています。「11:4 信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ、そのいけにえによって、彼が正しい人であることが証しされました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だと証ししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって今もなお語っています。」

私たちは絶えず、信仰者として世の流れに抗うように召されています。普通で考えたら、当たり前のようなことも、信仰によって、主が言われているのだからという理由だけで、その恵みの中に生きることを選びます。

そして、アベルは、自分自身で、初子を、しかも肥えたものを持ってきています。これは、第一に、自分自身を主の前に持ってきているということです。カインが、主への礼拝を後回しにしている、これでは礼拝になっていないのに対して、アベルは、自分にとっての最も大切なものを主に献げます。礼拝というのはこういうものです。主ご自身が、最も大切なもの、すなわちご自分の初子、独り子を私たちにくださいました。ですから、私たちが感謝の応答として、自分の最も大切なものを献げます。このように、互いに第一にしていく中で、初めて交わりが成り立ちます。

カインの献げ物に主が目を留められなかったので、彼は激しく怒っています。人間的には、今の言葉を使えば、「逆切れ」です。自分のしていることを全て否定された気分なのでしょう。しかし、そもそも、人は神の恵みと憐れみによって生きているのです。神のなされることを受け入れ、へりくだって歩むことに召されています。しかし、自分の行い、自分の力と知恵で生きるのだと考える者は、そうしたものが神の目には何でもない、無に等しいことを知った時に、このように激しく怒るのです。

次第に見えてくる姿があります。実は、カインは女の子孫ではもちろんなく、蛇の子になっているということです。蛇の子孫とは、具体的に、終わりの日に出てくる獣です。獣が、そしてその国の住民が行っていたことを思い出してください。「黙 13:6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」「16:9 こうして人々は激しい炎熱で焼かれ、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名を冒瀆した。彼らが悔い改めて神に栄光を帰することはなかった。」このように、神の主権に対して、激しく怒り、冒瀆しているのです。これから、神ではなく、蛇、すなわち悪魔に動かされていくカインの姿を見ます。

⁶主はカインに言われた。「なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。⁷もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。」

私たちが、字面だけを見れば不公平に見える箇所も、神はすべて人の心を知っておられますから、受け入れられなかったのです。カインは、自分が良いことをしていなかったことを自分も分かっ

ていたのです。それを主は、指摘しておられます。

そして、優しく警告しています。たった今、罪が戸口で待ち伏せしていると。そして、カインが罪を犯すように恋い慕っていると。これは、女が男を恋い慕っていると同じ表現ですが、治めようとしていと言い換えられます。けれども、あなたは治めなければいけない、ということです。私たちは、神のかたちに造られており、まず、自分自身に対して、自分を支配しようとしてくる罪を治めなければいけません。

2B 大地からの呪い 8-16

⁸カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。

これが、カインの道です。自分の道を選び、それを神に受け入れられなかったら、激しく怒ります。そして、信仰で生き、神に正しいと認められた者に妬みます。そして殺します。この、弟殺しが、野で行われたことに注目してください。まるで蛇が、エデンの園において、罪を犯すようにそそのかしたようです。この背後に、悪魔が働いていることは確実です。

この視点をもって、ヨハネ第一 3 章を読みたいと思います。11-12 節を読みます。「3:11-12 互いに愛し合うべきであること、それが、あなたがたが初めから聞いている使信です。12 カインのようになってはいけません。彼は悪い者から出た者で、自分の兄弟を殺しました。なぜ殺したのでしょうか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。」ここの「悪い者」とは、8 節に出てくる「悪魔から出た者」のことです。罪を犯している者は悪魔から出ており、それで、兄弟を憎んでいます。罪を犯しているか、そうでないかで、「神の子どもと悪魔の子どもの区別がはっきりします。」と言っています(3:10)。カインにおいて、いかに悪魔の子どもになるのかが、よくわかります。

そして午前礼拝でお話ししましたように、信仰の人を、肉の人は迫害するということです。イエスが、同胞のユダヤ人指導者に対して語られました。信仰によって、神の正しさが明らかにされます。その人自身が正しいのではなく、神の恵みによって正しさが明らかにされます。それで、肉の人は妬み、神を認めていないという事実からは目を逸らし、信仰によって、恵みの中にいる人を妬むのです。そして、その妬みによって攻撃します。

⁹ 主はカインに言われた。「あなたの弟アベルは、どこにいるのか。」カインは言った。「私は知りません。私は弟の番人なののでしょうか。」¹⁰ 主は言われた。「いったい、あなたは何ということをしたのか。声がする。あなたの弟の血が、その大地からわたしに向かって叫んでいる。

主は、当然、知らないから「どこにいるのか」と聞かれたのではなく、カインが自発的に罪を認めるように気づかせるため、聞かれました。こうやって主は、親身に語りかけ、彼が自発的にへりくだ

ることを待っておられました。ところが、彼は、しらばっくれています。悪魔は嘘をエバに吹き込みましたが、カインは、息を吐くように嘘を主に対して言いました。

しかし、「**あなたの弟の血が、その大地からわたしに向かって叫んでいる**」とあります。カインは隠れてアベルを殺したけれども、大地はその証言者であるという意味合いがあるでしょう。そして、カインの流した血に対して、それを公正に裁かれるよう、叫びがあるということです。聖書では、このように、叫びが地から聞こえて、それを主が聞いてくださるという箇所があります。

¹¹ 今や、あなたはのろわれている。そして、口を開けてあなたの手から弟の血を受けた大地から、あなたは追い出される。¹² あなたが耕しても、大地はもはや、あなたのために作物を生じさせない。あなたは地上をさまよい歩くさらい人となる。」

これまで、大地に対するのろいを主は宣言されていましたが、ここではカイン自身が、のろわれたものになっています。大地が口を開けるという表現も、他の箇所で見つけることができます。例えばアロンとモーセに反抗したコラです。大地がコラを呑み込みました。カインは、これまで大地を耕していましたが、もはや作物は生じないように主がされたので、放浪する者に変えられました。

¹³ カインは主に言った。「私の咎は大きすぎて、負いきれません。¹⁴ あなたが、今日、私を大地の面から追い出されたので、私はあなたの御顔を避けて隠れ、地上をさまよい歩くさらい人となります。私を見つけた人は、だれでも私を殺すでしょう。」

カインは、自分のしたことに対する仕打ちがあまりにも重いと訴えています。それは、大地の面から追い出されるということは、安住できる場所はなくなってしまうということです。どこにでも主はおられるので、その御顔を避けるには、さまようしかないではないかということです。ちょうど全国指名手配の犯人のようになるということです。

そして、「**私を見つけた人は、だれでも私を殺すでしょう**」と言っています。この時点で、すでに、アダムとエバからは、アベルの他に、もっと多くの息子や娘が生まれていることが分かります。創世記 5 章には、アダムには、息子たち、娘たちが生まれたということが書かれています。ですから、アベルの殺人への復讐のために、彼らが私を殺すのではないかと恐れているのです。

いやはや、自分が殺したのですから、そのままへりくだって、罪を認めればよいのに、そうしないでひたすら、自己憐憫に陥っています。しかし、主はカインに恵みの機会を与えています。彼が生きることができるように、憐れみます。

¹⁵ 主は彼に言われた。「それゆえ、わたしは言う。だれであれ、カインを殺す者は七倍の復讐を受

ける。」主は、彼を見つけた人が、だれも彼を打ち殺すことのないように、カインに一つのしるしをつけられた。

どのようなしるしか分かりませんが、カインにしるしを付けられました。そして、カインを殺したら七倍の復讐を与えるということで、カインを殺すことの抑止になります。「七」の数字は、神の数字、完全数です。

¹⁶ カインは主の前から出て行って、エデンの東、ノデの地に住んだ。

主が自分を守ってくださると分かったので、彼は定住しました。「ノデ」という地です。「さすらい人」と言葉が似ています。さすらい人の集まる場所だったのかもしれませんが。そして、エデンの東にありました。アダムとエバも、エデンの園の東に住んでいましたが、そこではないところ、おそらくさらに東にあったのでしょう。

ここで大事なのは、「主の前から出て行って」ということです。アダムとエバは、エデンの園から追放されていましたが、近くに住んでいたのでしょう。しかし、さらにそこから出て行って、主の前からも去っていくようになったわけです。

3B 文明の中の暴力 17－24

しかし、カインはそれから悔い改めることはありませんでした。彼の子孫から、暴虐の世界が広がります。

¹⁷ カインはその妻を知った。彼女は身ごもってエノクを産んだ。カインは町を建てていたので、息子の名にちなんで、その町をエノクと名づけた。

先ほど話しましたように、カインの妻ですが、すでにアダムとエバから息子たち、娘たちが生まれています。その間でさらに息子、娘が生まれている可能性さえあります。当時は、近親の結婚でも遺伝子による欠陥とかはなかったのでしょう。

カインは、息子に「エノク」と名づけます。「献げる」という意味の名前です。神に彼を献げればよかったのですが、今、「町を建てて」いたとあります。さすらい者であったのに、彼は守りが与えられたのをよいことに、町を建てています。反抗しています。その町に、息子エノクの名を付けています。その町をエノクのもの献げたということにしたかったのでしょう。権力者の始まりです。

¹⁸ エノクにはイラデが生まれた。イラデはメフヤエルを生み、メフヤエルはメトシャエルを生み、メトシャエルはレメクを生んだ。¹⁹ レメクは二人の妻を迎えた。一人の名はアダ、もう一人の名はツィラ

であった。

「メレク」は、「勇士」また「征服者」という意味があります。権力を持つだけでなく、人々を力で征服していく者となっていました。

そして、メレクは、主の定められた結婚に反抗しています。男が父と母から離れて、一人の女と結ばれるというのが、結婚でした。それを二人の妻を迎え、一夫多妻制を始めさせています。それは聖書の時代に長く続きますが、元々はそうではなかったのです。そして、この妻たちの名前、「アダ」は「飾る」という意味で、「ツィラ」は「輝く」という意味です。性的快楽も含まれた意味です。

²⁰ アダはヤバルを産んだ。ヤバルは天幕に住む者、家畜を飼う者の先祖となった。²¹ その弟の名はユバルであった。彼は竖琴と笛を奏でるすべての者の先祖となった。²² 一方、ツィラはトバル・カインを産んだ。彼は青銅と鉄のあらゆる道具を造る者であった。トバル・カインの妹はナアマであった。

カインの子孫から、文明が生まれました。牧畜業、そして音楽、それから鉄鋼業が生まれています。鉄鋼業は驚くべきことです。「鉄」は、人間の歴史の中で紀元前千年頃にならないと普及していないものです。イスラエルの初代王のサウルがペリシテ人と戦った時に、イスラエル人には鍛冶屋がいなかったという記述があります(1サムエル 13:19)。

²³ レメクは妻たちに言った。「アダとツィラよ、私の声を聞け。レメクの妻たちよ、私の言うことに耳を傾けよ。私は一人の男を、私が受ける傷のために殺す。一人の子どもを、私が受ける打ち傷のために。²⁴ カインに七倍の復讐があるなら、レメクには七十七倍。」

ついにカインの道は、悪い意味で花開いてしまいました。カインは、一度も神に向きなおろうとせず、そのためやることは反抗することでした。町を建てました。そのために、文明は発達します。しかし、彼の怒り、憎しみ、被害者意識の種は、レメクの暴力で実となって結ばれています。自分の妻たちに、人を殺すことを豪語しているのです。

一人の男に傷つけられたようです。それに対して自衛行為をしているのではないです。打ち傷を受けたので、その男を殺すと言っているのです。そして、主がカインに語られた約束を歪曲しています。主が七倍の復讐をされると言われたのに、彼は自分自身で復讐すると言っています。神だけができる裁きを、自分の手で下そうとしています。それだけではありません。七の七十倍で復讐するということです。目には目、歯には歯という、同等の傷による報いではなく、人殺しという過剰な自己防衛ですが、それを誇っています。

まさに、神なしの暴力の世界、今の世界のようにあります。いや、ここが始まりなんですね。今もカインの道があるということです。文明は発達します。科学技術は発達します。しかし、人は進歩していないのです。むしろ、そのような科学を悪用して、さらに傷つけています。SNS での中傷の問題は、SNS という技術が発達したことによって、言葉の暴力が加速化しました。

ところで、イエスが、ペテロや弟子たちに対して、「七の七十倍、赦しなさい」と命じられたのは、レメクのこの言葉を意識されたのではないかと思います。ペテロが、人を赦すのは七回ですか？と聞くので、イエスは「七の七十倍」と言われました。私たちは、このように赦しと平和によって、力と復讐の世界に打ち勝つように召されています。

4B 主の名を呼ぶ子孫 25－26

²⁵ アダムは再び妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけた。カインがアベルを殺したので、彼女は「神が、アベルの代わりに別の子孫を私に授けてくださいました」と言った。

ついにここから、主の贖いが始まります。暴虐がはびこっていくその始まりに、主は新たに男の子を、アダムとエバにくださいました。「セツ」は「土台」という意味です。殺されたアベルの代わりに、主がこれからの土台を、平和の君が来る土台をくださったということでしょう。

²⁶ セツにもまた、男の子が生まれた。セツは彼の名をエノシュと呼んだ。そのころ、人々は主の名を呼ぶことを始めた。

セツの息子のころから、主の名を呼び始めています。これは、主の名を呼び求め、礼拝を献げるようになっていったということです。そして、セツの子孫から、正しい人ノアが出てきます。暴虐の世界を主は水で裁かれますが、ノアとその家族を救われます。同じように、主は、アダムによる罪と死の支配から、主イエスによる義といのちの支配を広げさせるのです。(ロマ 5:21)

2A セツの子孫 5

1B 死の支配 1－5

¹ これはアダムの歴史の記録である。神は、人を創造したとき、神の似姿として人を造り、² 男と女に彼らを創造された。彼らが創造された日に、神は彼らを祝福して、彼らの名を「人」と呼ばれた。

ここで大きな区切りがきています。「歴史」の記録とありますね。前回は、2 章 4 節で「天と地が創造されたときの経緯である」と、「経緯」と訳されていました。

これまで、私たちが学んできた、とても大切なことがまとめられています。一つは、神の似姿に人が造られたということ。もう一つは、神に似せて、男と女に造られたということです。

それから主がご自分の造られた天地を祝福して、彼らに「人(アダム)」と名づけたとあります。ですから、アダムというと男であると同時に、女を含んで、人間全般を指して「人」と名づけられているのがわかります。

³ アダムは百三十年生きて、彼の似姿として、彼のかたちに男の子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた。⁴ セツを生んでからのアダムの生涯は八百年で、彼は息子たち、娘たちを生んだ。⁵ アダムが生きた全生涯は九百三十年であった。こうして彼は死んだ。

ここは、罪の影響が始まっている様子がうかがえます。アダムの息子は、アダムの似姿で、アダムのかたちに生まれてきています。ここに、「罪の受け継ぎ」があるのです。そして、「彼は死んだ」という言葉が重みを持ちます。彼は長生きをしましたが、それでも死んだのです。人は元々、死ぬようには造られていなかった、永遠に神と共に生きるように造られました。それが許されなくなったのです。「こういうわけで、ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がった(ローマ 5:12)」

これから、旧約聖書では系図が、ところどころ、大切な所に出てきます。そこには極めてはっきりとした意図があります。女の子孫はだれか？ということ問い続けながらの系図なのです。そして、新約聖書の初めで、その系図が止まります。マタイの福音書、「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」アブラハムの子孫によって、すべてが祝福されるという、キリストが来られる約束がありました。またアブラハムの子孫がダビデですが、ダビデの世継ぎの子が、永遠の神の国を治めるという約束がありました。それをかなえるのが、神の御子キリストだということです。

ところで、アダムの全生涯は、「九百三十年」です。一千年に七十年足りない年数です。ここには意味があります。七十年足りないというところに、神の似姿から堕ちてしまっているということを、暗に示しています。ですから、黙示録 20 章で、女の子孫であるキリストが地上を治められる時は、千年間の統治になっています。アダムの世界を超えて、神の世界に入ったことを示しています。

2B 短くなる寿命 6-17

⁶ セツは百五年生きて、エノシュを生んだ。⁷ セツはエノシュを生んでから八百七年生き、息子たち、娘たちを生んだ。⁸ セツの全生涯は九百十二年であった。こうして彼は死んだ。

セツの寿命が、アダムより少し減っています。九百十二年です。

⁹ エノシュは九十年生きて、ケナンを生んだ。¹⁰ エノシュはケナンを生んでから八百十五年生き、息子たち、娘たちを生んだ。¹¹ エノシュの全生涯は九百五年であった。こうして彼は死んだ。

エノシュは、「壊れやすい」という意味があります。人間の弱さを話しています。人が少しずつ寿命を減らしていることをかもしだしています。

¹² ケナンは七十年生きて、マハラルエルを生んだ。¹³ ケナンはマハラルエルを生んでから八百四十年生き、息子たち、娘たちを生んだ。¹⁴ ケナンの全生涯は九百十年であった。こうして彼は死んだ。

ケナンは「鍛冶屋」です。これは興味深いです、4 章 22 節、カインの系図において、トバル・カインが青銅や鉄の鍛冶屋であったとあるからです。つまり、ケナンはそのような世界の中で鍛冶屋としての職業を持っていた、ということになります。4 章と 5 章は同時期に、同居していました。別々の世界ではなく、地理的、物理的には同じところにいたのです。

私たちが生きている世界でも同じです。肉の子孫に属しているのか、霊の子孫に属しているのか、同じ職業を持っても全く意味が異なります。

¹⁵ マハラルエルは六十五年生きて、ヤレデを生んだ。¹⁶ マハラルエルはヤレデを生んでから八百三十年生き、息子たち、娘たちを生んだ。¹⁷ マハラルエルの全生涯は八百九十五年であった。こうして彼は死んだ。

「マハラルエル」は「神をたたえる」という意味です。エノシュの時代に、主の名で呼び求めている、マハラルエルの時には、神を賛美しています。カインの子孫、レメクの息子ユバルの時に、竖琴と笛を奏でるすべての者の先祖となったとありますが、そうやって楽器ができている時に、マハラルエルは、もしかしたら主に対して、楽器を奏でていたのかもしれませんが。

墮落していた世界があり、そこに文明がありましたが、その中にあるものを用いて、主をあがめることができます。これを、しばしば「文化の贖い」と呼びます。異教や世俗の文化にあるものを、主のために用いて、主のものに贖われていくということです。

そして、マハラルエルは「八百九十五年」になっています。さらに減っています。これが、ノアの時代の洪水、また、アブラハムの族長時代にも続き、モーセの頃には今とほぼ同じ、七十年や八十年に落ち着きます。それでモーセは、詩篇で、人生のはかなさと、そこにある神の裁きを歌にしています。「90:10-12 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。そのほとんどは労苦とわがわいです。瞬く間に時は過ぎ私たちは飛び去ります。11 だれが御怒りの力をあなたの激しい怒りの力を知っているでしょう。ふさわしい恐れを持つほどに。12 どうか教えてください。自分の日を数えることを。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」

3B 死を見ない者 18-24

¹⁸ ヤレデは百六十二年生きて、エノクを生んだ。¹⁹ ヤレデはエノクを生んでから八百年生き、息子たち、娘たちを生んだ。²⁰ ヤレデの全生涯は九百六十二年であった。こうして彼は死んだ。

ヤレデは、「子孫」という意味があります。寿命が再び長くなっています。「九百六十二年」です。

²¹ エノクは六十五年生きて、メトシェラを生んだ。²² エノクはメトシェラを生んでから三百年、神とともに歩み、息子たち、娘たちを生んだ。²³ エノクの全生涯は三百六十五年であった。²⁴ エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。

ここが、これまでのパターンを切るような出来事が起こります。エノクは、神と共に歩みました。そして、死を見ずに天に移されました。

エノクという名前の意味は、「献げること」です。彼は神に自分自身を献げた人でした。そして、「エノクはメトシェラを生んでから三百年、神とともに歩み」とあります。メトシェラの名前の意味は、「彼が死ぬとそれは送られてくる」という意味です。裁きが来るということです。神から裁きが来ることを彼は前もって知ったのでした。その危機感から、主と共に歩む生活を始めたのでしょう。

神と共に歩むことは、信仰によって歩むことであり(2コリント 5:7)、そして、光の中、清さの中に歩むことであり(1ヨハネ 1:5-7)、そして神に言われることに同意して歩むことです(アモス 3:3)。ヘブル 11 章に、エノクが信仰によって神を喜ばせていたと書いてあります。「11:5 信仰によって、エノクは死を見ることがないように移されました。神が彼を移されたので、いなくなりました。彼が神に喜ばれていたことは、移される前から証しされていたのです。」

彼は生きている時に、預言活動を行っていました。ユダの手紙にこう書いています。「14-15 アダムから七代目のエノクも、彼らについてこう預言しました。「見よ、主は何万もの聖徒を引き連れて来られる。15 すべての者にさばきを行い、不敬虔に生きる者たちのすべての不敬虔な行いと、不敬虔な罪人たちが主に逆らって語ったすべての暴言について、皆を罪に定めるためである。」ノアの時の神の裁きを、このように前もって伝えていました。そして、これは終わりの日の預言でもあり、「主は何万もの聖徒を引き連れて来られる」と預言していたのです。つまり、これは私たちの時代、主が再び来られることも預言していたのです。」

エノクは、我々キリストにある者たちが、神と共に歩む模範となっています。エノクは、洪水の裁きが来る前に天に引き取られましたが、同じようにキリスト者が生きたままで主に引き取られるのです。テサロニケ第一に書かれています。「4:16-17 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよ

みがえり、17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」神が終わりの日に地上に御怒りを注がれる前に、私たちが天に引き上げられ、救われるのです。

4B 呪いの大地の慰め 25－32

²⁵ メトシェラは百八十七年生きて、レメクを生んだ。²⁶ メトシェラはレメクを生んでから七百八十二年生き、息子たち、娘たちを生んだ。²⁷ メトシェラの全生涯は九百六十九年であった。こうして彼は死んだ。

メトシェラは、この系図の中で最も長く生きた人です。彼の名前が先ほど申し上げたように、「彼が死ぬ時に、それが来る」というものです。彼の年齢を計算すると、ちょうど洪水の来る直前で死んだことが分かります。7 章 11 節に、「**ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日、その日に、大いなる淵の源がことごとく裂け、天の水門が開かれた。**」とありますが、計算すると、ノアが六百歳の時に彼が死にました。

²⁸ レメクは百八十二年生きて、一人の男の子を生んだ。²⁹ 彼はその子をノアと名づけて言った。「この子は、主がのろわれたこの地での、私たちの働きと手の労苦から、私たちを慰めてくれるだろう。」³⁰ レメクはノアを生んでから五百九十五年生きて、息子たち、娘たちを生んだ。³¹ レメクの全生涯は七百七十七年であった。こうして彼は死んだ。

レメクは、「兵士、征服者」という意味ですが、これはカインの子孫、レメクと同じ名前です。カインの子孫のほうのレメクがその時代の有力者だったのでしょうか、それにちなんだ名となっていますが、彼はむしろ「安息」を求めています。ノアは、「休む」とか「慰め」の意味があります。

それで、彼がノアを生んだ時に、「**私たちを慰めてくれるだろう**」と言っています。この子が女の子孫かもしれないと期待していたからです。アダムが罪を犯して、労苦して土地を耕すことになりましたが、それを終わらせてくれるのではないかと期待しているのです。

³² ノアは五百歳になった。そしてノアはセム、ハム、ヤフェテを生んだ。

こうして、ノアの生涯に入ります。彼が五百歳になって、セムを生み、それから、ハム、そしてヤフェテを生みました。暴虐の世界に対して、神は裁きを行われます。けれども、箱舟によってノアの家族を救い、その箱舟はアララト山に留まります。こうやって、平和の世界が暴虐の世界に打ち勝つのです。そこに、キリストにある希望があります。

私たちは、蛇の子孫に連なるのか、それとも女の子孫に信仰と期待を置く者か？ 二者択一です。